特集Ⅱ：現代の学校と教師の仕事

身の回りの野草を知る・・・命の教育

栗　原　光　子

（東京都足立区立江北小学校）

The Current Trend of the School and the Teacher's Work in Japan ;

A Study on a Glass around us ; an Education of a Life

KURIHARA　MITSUKO

(Kouhoku Elementary School of Adachi-Ku, Tokyo)

要　旨

生活科で昔から伝わる草を使っての遊びや色水で絵を描いたりブローチ作りなどをしたりして、野草の名前を覚えさせることに取り組んでいる。子ども達は興味を示し、どんどん野草の名前を覚えていった。覚えたものを家族に教えているという報告もある。３年生になって学習の中で、野草の名前がすらすら出てくるという事も聞いた。学習はもちろん、生活の中でもっと自然との接触を多くし、自然と仲良くしていけたらと思う。

１．主題について

今、地球温暖化が大問題になっています。人間を含めた地球上のあらゆる生物の存亡がかかっています。これほど大きな問題も、主たる原因を作った私たち人間一人一人が解決へ向けて行動を起こしていかなければ、解決へはつながりません。しかし一朝一夕に好転するものでなく、長く継続していく必要があります。それには、未来を担う子どもたちの力が大きいのです。そのため環境教育は、声を大にして叫ばれています。それはとりもなおさず、命の教育だと思います。

身の回りの様々な命の輝きに目を向けることが、命の教育であり、環境教育の一歩だと思います。その命の美しさに素直に感動し、輝きに目を向け、尊さに気付くことは、学習の原動力となり、生きる力を育てていくことだと思います。

85才になる私の母は、植物の名前をよく知っています。母だけでなく、同世代の人たちは皆よく知っています。私は小さい時田舎に育ち、野草とたくさん遊び、田んぼや畑、山といろいろなところで野草にふれてきました。その時名前がわからなく、後で名前がわかったのがたくさんあります。でも今の時代野の草を使っての遊びはもちろん、生活の中でも自然との関わりがどんどん少なくなってきています。代々受け継がれてきたものも失われてきています。

このようなことを漫然と思ってきたことが子どもたちに植物の名前を教えたいという気持ちになりました。さらにこんなことがきっかけでその思いはいっそう強くなりました。

ある晴れた日、青空よりも青く、花壇の花

よりも美しく、日光に、青色が透き通るように輝いて、オオイヌノフグリが咲いていました。思わず立ち止まり、しばらく眺めていると、

「先生何しているの。」

と声がかかりました。教え子だった子どもの母親でした。

「とってもきれいだから見ているの。」

「きれいですね。何という名前ですか。雑草の名前って、一つもわかんないんです。」

この言葉を聞いて、草花「特に雑草といわれる野草」の名前を教えていきたいと思いました。

２．研究の目的

授業の中で、植物の名前を教える価値があるだろうか。ただ単に名前を知って、なんの意味があるだろうか。何千何万という植物の名前を知ってなんになるだろう。一つ一つの名前を知ることでなく、植物を体系的に、系統的に学んでいくことが大切なのではないか。植物は、花を咲かせ、そして実がなって増えていくという法則を学ぶことの方が必要ではないか、という考えが頭をよぎります。

しかし一方では、子どもたちはどこで名前を知るのでしょうか。花屋さんで売っている花や花壇の花の名前は知る機会も多く、教えてくれる人も多いでしょう。しかしいわゆる雑草という草花の名前を知る機会はほとんどなく、教科書にもあまり出てきません。大人の中でも知っている人は極端に少なくなっています。

今ここで何もしなければ、途絶えてしまうものがあまりにも多いように思います。授業の中で自然世界との接触を多くし、身の回りの植物の名前を知り、植物と親しくなり、自然と仲良くできるようにと思いました。

偉大な（私も強く思っています）植物学者「牧野富太郎博士」が、「この世の中に『雑草』という名の草花は1本もありません。昆虫でも草花でも名前を知ることで、そのものをもっとよく知ることができるのです。ものをよく知るということは、生きていく上でとても大切なことです。そして子どもの時に知ることで、一生の財産になるのです。」と言っていました。知識はもちろん、ものの見方、命あるものへの感性、学びの基本と命あるものへの感動がそこにはあると思います。

３．研究の仮説

小学校低学年は、どんなことにも興味関心を持つ時期です。身の回りの草花の名前やそれを使っての遊びなどを体験することで、自然の中での遊びや発見を楽しむようになります。名前を知ることで、一つ一つのものを豊かにとらえられるようになると考えました。それが発展して、調べる力、論理的、体系的に物事を考えたり、まとめたりする力を養うことができると考えました。

４．研究の実践

◎指導の留意点

- 実際に手にすることのできる植物。
- 歩いていて、遊んでいて目にすることができる身の回りの植物。
- 遊びや特徴をとらえながら、楽しく覚えられるような植物。
- 一度にたくさんの種類をやらない。
- 一年を通じて、継続してやる。

◎観点別の指導

実際にはその植物を子ども達が一番目に触れる時あるいはその植物を扱うのにふさわしい時節に指導した。まとめるに当たってわかりやすく観点別にした。

①草花で遊べる植物

ヤエムグラ　ナズナ　スギナ

カヤツリグサ　エノコログサ

②動物の名前がついている植物

カラスノエンドウ　カラスムギ

カラスウリ　イヌタデ　イヌノフグリ
トラノオ
③対の名前がある植物
ハハコグサとチチコグサ
メヒシバとオヒシバ
コバンソウとオオバンソウ
④形が似ている植物
ハルジオンとヒメジオン
ホトケノザとヒメオドリコソウ
シロツメクサとアカツメクサ
⑤匂いに特徴のある植物
ドクダミ　ヘクソカズラ　ミント
⑥最近急に目につくようになった植物
ナガミヒナゲシとベニバナユウゲショウ
⑦物にくっつく植物
オナモミ　アメリカセンダングサ
イノコヅチ
⑧春の七草　秋の七草
⑨校庭の花
サクラ　モクレン　ツツジ　ミカン
キリ　クチナシ　ザクロ　キンモクセイ
ツバキ
⑩色遊びのできる植物
ヨウシュヤマゴボウ　ツユクサ
アサガオ
⑪種子集め
カボチャ　カキ　リンゴなど
（※写真参照）
⑫種子でブローチ作り
⑪の種子を使って、形やデザインを工夫してブローチを作る
⑬上記以外に取り扱った植物
フキノトウ　フキ　アブラナ　ヨモギ
ヒガンバナ　ネジバナ　マツヨイグサ
カタバミなど

◎実践事例

①草花で遊べる植物

a．ねらい

草花で遊ぶことによって、その植物の特徴を知り、親しむ

b．材料

ヤエムグラ、ナズナ、スギナ、エノコログサ、カヤツリグサ

c．指導方法、児童の様子

○ヤエムグラ

「ヤエムグラ」の葉っぱを、ブローチのように胸につけて教室に入る。葉を指しながら

「これはなんでしょう。」

「うわきれい」

「あっ、はっぱだ」

前に立っている児童を立たせ、その葉っぱをペタンと洋服につける。

「あ、くっついた。」

「ぼくにもつけて。」

「わたしもやってみたいな。」

肩や胸、お腹などにペタペタつけながら、

「これ、くんしょうのように見えますか。」

「見える。見える。」

「だから“くんしょう草”といいます。でも本当の名前は“ヤエムグラ”といいます。」

（児童のカードより）

黒板に「ヤエムグラ」と書く。そして一緒に名前を言ってみる。

遊んでみたい人と聞くと、遊びたいと教室は興奮状態に。

子供の机を班にして、紙にのせたヤエムグラをドサッとおく。子供達はまず自分の洋服に、手に足に髪の毛に、そして友

達にと、いろいろなところにおき、ついた、つかないと楽しむ。一段落したところで、茎はどんな形になっているかと問えば、「え、四角だ。」と驚く。茎は丸いものと何となく思いこんでいる。これから植物を見ていく時、茎にも注目していってもらいたいための発問であるが、今回はきっかけ作りにとどめる。

○ナズナ

細い茎を下へひっぱって、葉をぶらぶらにしたナズナをとり出し、児童の耳にあててゆらす。

「どんな音がする。」

するとあっちこっちから

「やったことある。」「幼稚園で遊んだよ。」などと口々に言い出してくる。体験している子がクラスの半分位いる。植物の名前を聞くと、「ペンペン草」という。「よく覚えていたね。」とほめ、正式には“ナズナ”という名前であることを知らせる。花や実の形には軽くふれるだけで、遊んで親しむ方に力を入れた。

○スギナは、茎のはかまのところを形をこわさずに抜き、そこに倒れないように上手にはめこみ、“どこでつないでいるか”とあてっこする遊びである。私が子供の頃さんざん遊んだものだが、クラスの子供達は経験したことがなかった。教えると楽しく遊べた。

○カヤツリグサは茎の両端からさいていき、四角の形ができる。私は十分に遊んだ思い出があるが、今の子供達は、カヤさえも知らず、遊んでいない。校庭にあったので取り扱った。

○エノコログサはネコジャラシとして知っているが、エノコログサという名前は知らなかった。教室に持っていくと、さわりたい、遊びたいという。ふわふわとした感触、手でにぎるともこもこと上に登ったり、下に消えていったりする遊びを楽しんだ。

d．後書き

植物で遊ぶというのは、だれもが楽しく遊ぶことができる。特に子供は、すぐのめりこみ夢中になって遊ぶ。そして大人が思いつかないことを発見し、発展させていく。おおいに遊ばせたい。学校の近くに広い空地があり、そこにはシロツメクサが白一面になって咲いている。そこで思いきり花輪を作ったり、茎でひっぱりっこして遊ばせたいなと思うが、柵がしてあり中に入ることができない。安全なところで遊ぶ所が欲しいと切に望む。オオバコは、昔は大きいのがあちこちにあり、いつも遊んでいたが、今は公園等に少しはえているくらいで、あまり目にしなくなった。今回は扱わなかったが、取りあげたい野草である。

②動物の名前がついている植物

a．ねらい

草花の名前には、動物の名前がついているものがあり、その動物を想像したりして親しむ。

b．材料

カラスノエンドウ、カラスムギ、カラスウリ、イヌタデ、イヌノフグリ、トラノオ

c．指導方法、児童の様子

○カラスノエンドウは毎年校長室の前に生い茂る。花の部分だけでなく実がしっかりついているものを教室に持ちこむ。豆が入っているさやの部分を見せ、エンドウ豆に似ていることを知らせる。そして名前は○○○ノエンドウといい、○○○には鳥の名前が入ることを知らせ、何の鳥が入るかを聞く。いろいろな鳥と一緒にカラスやスズメが出てくる。この草はカラスノエンドウだがスズメノエンドウもあることを知らせる。そして学校のどこにあるか探させる。

○カラスウリの花は夜に咲くが、１時間目

あたりだったらまだ花の形が残っているので、子どもたちに見せた。とてもきれいな花なので、子ども達を驚かせたいところだが、反応はいまいちであった。やはり夜咲いているところを見せたいと思う。正門の近くにあることを知らせる。

d．後書き

カラスウリはつる植物で下にはえている木を覆いつくしてしまうため、毎年かり取られてしまうのであるが、今年は学校がたのみ、そのままにしてもらった。実になるのが楽しみだが、赤でなく黄色かあるいは実がつかないかと心配している。そしてスズメウリもある。

動物の名前がついている植物はたくさんある。イヌガラシ、ムラサキサギゴケ、ブタクサ、ヘビイチゴなどは扱いたい。スズメノテッポウは昔は田んぼ一面にありそこにうまりながら笛をならしあって楽しんだ。子どもの本には出てくるが身の回りでは見当たらない。エノコログサの本名は狗尾草（犬の尾っぽ草）ニックネームはネコジャラシ英名はフォックステイル（狐のしっぽ）という犬と猫と狐の３種類の名がついていることを知らせたい。

ここからは授業のポイントのみにする。

③対の名前がある植物

a．ねらい

雌と雄、母と父、大と小の名前がついていて、そのちがいを知る。

b．材料

メヒシバとオヒシバ

ハハコグサとチチコグサ

オオバンソウとコバンソウ

c．指導方法　児童の様子

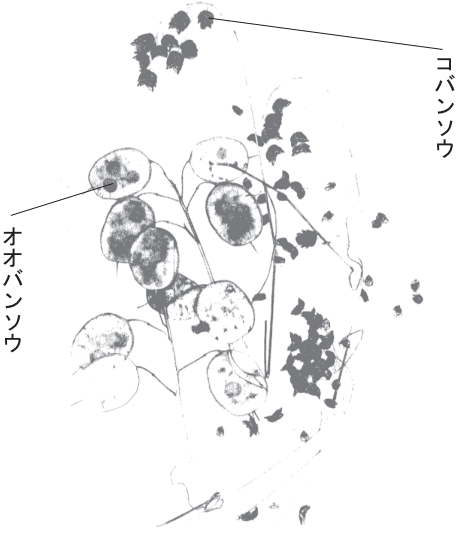
雌日芝と雄日芝の束を見せて似ているところや違っているところを聞く。メスの芝とオスの芝でメ○シバ、オ○シバとい い○の中に入る文字は何でしょうと聞く。さまざまな文字が出てくるが正解はなし。ヒ(日)が入ることを教える。その後スケッチをする。

子ども達はメヒシバとオヒシバの名前と形の違いを理解できた。「対」の意味がわかってきたからだと思う。

（児童のスケッチより）

ハハコグサ（七草では御形“ごぎょう”）は春の七草の学習の時写真で見せ、咲いている時にチチコグサと同時に実物を示し比べる。チチコグサはハハコグサに比べて花は小さくきれいでない。

オオバンソウコバンソウは身の回りにはないが花咲か爺いを歌っているので、実物を取り寄せて見せた。昔の人の名前のつけ方のうまさを実感した。



④形が似ている植物

a．ねらい

見ただけでは区別がつきにくいので違いをしっかり観察する。

b．材料

ハルジオン・ヒメジオン

ホトケノザ・ヒメオドリコソウ

シロツメクサ・アカツメクサ

c．指導方法　児童の様子

ハルジオンとヒメジオンを見せて「この草を見たことのある人」と聞くと、ほとんど全員が「見た。」「見たことある。」「○○にさいてるよ。」と口々に答える。「名前は何ていうの。」と聞くがわからない。実はこの草は2種類あるが見分けがつくかを聞く。じっと見つめ、色がちがう、大きさがちがう等と出てくる。そこで、はっきりした違いは茎の中であること、茎の中が空いているのがハルジオン、茎の中がつまっているのがヒメジオンであることを教える。その後しっかりと観察させ、外から見た違いにも気づかせる。

d．後書き

シロツメクサとアカツメクサ（色と花のつき方、茎の伸び方）やホトケノザとヒメオドリコソウ（葉のつき方）。ぱっと見るとよく似ているが、よく見ると違いに気付く。それが名前と深く関係していることを理解させる。

⑤匂いに特徴がある植物

a．ねらい

独特な匂いのある植物を知る。

b．材料

ドクダミ　ヘクソカズラ　ミント

c．指導方法　児童の様子

○ドクダミを教室に持ち込むとほとんどの子が見たことがあると答える。名前を聞くとクラスの1～2人がおずおずと小さい声で「ドクダミ？」と心配そうに言う。大きい声で「当たり。ドクダミです。」と言うと、「知ってる知ってる。」「聞いたことある。」「家にドクダミ茶があるよ。」等と聞こえてくる。薬草として役立っていることを知らせる。

○ヘクソカズラは花が小さいがとてもきれいなかわいい花であることを強調してから、一人一人にしっかりと匂いをかがせる。

「え」「変な匂い」「いやな匂い」とあちこちから聞こえてくる。「への匂い」「くその匂い」と言わせた後で、だから『へくそ』という名前の草であることを知らせる。後でへくそだけでなく、ヘクソカズラが正式な名前である事を教える。

○ミントは学校にたくさんあり、良い匂いのあることも知らせる。私はこの匂いが大好きであるが子どもは、この匂いはいやという子も多い。

d．後書き

ドクダミは一度名前を教えた後は次から自信を持って名前が言える草である。そこで花が咲いている時期に扱う。するとその後で、「先生○○にドクダミの花が咲いていたよ。」「きれいだったよ。」等という報告がけっこうあちこちから入ってくる。ヘクソカズラは黄色い実ができたころ、リース作りの材料として、学習に取り入れていく。

⑥最近、目につくようになった植物（地球温暖化？）

a．ねらい

身近かにあって、図鑑にあまりのっていない植物を知る。（帰化植物）

b．材料

ナガミヒナゲシ（ヨーロッパ原産）

ベニバナユウゲショウ（アメリカ原産）

c．指導方法・児童の様子

道端に咲くナガミヒナゲシの花を持って

いくと、「見たことある。」「○○に咲いていたよ。」と声がいっぱい出てくる。急に見かけるようになった植物である。オレンジ色であざやかなのでたった一輪ポツンと咲いていても目につく花である。子ども達は、見かけたことはあるが名前は知らない。そこで花が咲き終わった後の実が、どんな形かを聞く。種とりをしている子が多いが反応がない。実物の実を見せ、長いことを確かめる。だから長実で、ナガミヒナゲシという名前であることを教える。

ナガミヒナゲシの花

ベニバナユウゲショウも最近見かけるようになった。栽培植物かと思っていたがある日土手にびっしり咲いているのを見てびっくりした。名前を都市農業公園で教えてもらい、子ども達に伝えた。

ベニバナユウゲショウの花

d．後書き

日本の植物80%位が帰化植物であると言われることもあるが、ナガミヒナゲシの広がりの速さに驚いている。ドライブしても地方に行ってもナガミヒナゲシを見かける。この種子はとても小さく軽いからだろうか。それにアルカリを好み、コンクリートの道が大好きだそうだ。

⑦物につく植物

a．ねらい

物につく種子のしくみを知る。

b．材料

・オナモミ

・アメリカセンダングサ

・イノコズチ

c．指導方法　児童の様子

オナモミは毎年花壇にびっしり実をつける。洋服につけたり的あてしたり、もよう作りをしたりして十分に楽しむ。

オナモミの的あて

アメリカセンダングサは学校の近くの空き地にたくさんある。くっつき方が全く違うつくりになっているのを観察する。

d．後書き

オナモミは１年生でも楽しむがその季節になったら何年生になっても十分遊ばせたい。

⑧春の七草　秋の七草

a．ねらい

春の七草　秋の七草を知る

b．材料

春の七草、秋の七草の絵。用意できる植物

c．指導方法、児童の様子

秋の七草は学校のススキの花が咲いた頃、取り上げる。秋の七草といってもあまりピンとこないが、春の七草というと知ってるという。それと同じように秋の七草

があることを知らせ、教える。キキョウ　オミナエシ　ナデシコは花屋さんで求められるがフジバカマ　クズ　ハギは写真にする。

秋の七草の写真

d．後書き

春の七草は有名でありゴロ合わせもよく、すぐにほとんどの子が覚えてしまった。秋の七草は覚えにくいが、覚えさせている。子ども時代に覚えるとどういう訳か忘れないものである。

⑨校庭の花

a．ねらい

季節毎に咲く校庭の木の花を覚える。

b．材料

サクラ　モクレン　ツツジ　ミカン　カキ　キリ　クチナシ　ザクロ　キンモクセイ　サザンカ　ツバキ　ピラカンサウメ

c．指導方法　児童の様子

サクラで一重と八重咲きがあることを教えその他の花にも一重と八重があることを教える。花が咲いている時にその花の写真や実物を見せ、どこに咲いているか何という名前かを次の時間迄の宿題にしたりする。次の時間に名前を教える。

d．後書き

江北はワシントンに送られた五色桜の古郷である。五色桜は八重桜が主である。そのため、一重と八重の違いをしっかり理解させておきたかった。

⑩色遊びのできる植物

a．ねらい

実で色水を作り絵を描いて、楽しむ。

b．指導方法　児童の様子

一人一人自分の色水を作る。ビニール袋にヨウシュヤマゴボウと水を入れ、しっかりもむ。底をちょっと切り、水だけ出す。この作業が子どもは大好きである。絞り染めも楽しい。

ヨウシュヤマゴボウの色水でかいた絵

⑪種子集め

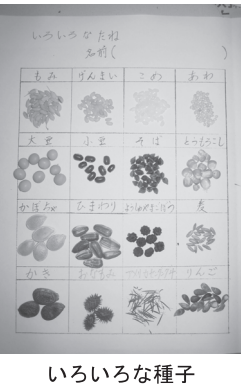
a．ねらい

どんな色や模様や形をしているのかを知る。

b．指導方法

児童の様子

実りの秋でいろいろな種子を集めようと声かけをする。私の方で穀物を用意する。穀物を書いた用紙を渡し、紙にボンドをたらしそこに穀物を置いてゆく。その他は自分で集めた種子をはりつける。メロン、ブドウ、ピーマン、アサガオ、オシロイバナ、フジのたね、マツの実、ホウセンカ、アブラナ等が集まる。



いろいろな種子

c．後書き

五穀米、ペットのえさなどを調べてみて

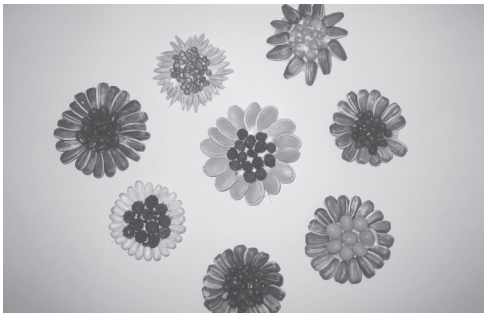
も楽しくできそうである。

⑫種子でブローチを作る

a．ねらい

種子の持つ形や色、模様そして次への命をつなげる美しさやパワーに気付かせると共に、それを生かしてブローチを作らせた。

b．指導方法　児童の様子



種子で作ったブローチ

種子で作ったブローチの見本を見せ、このようなものを作るから種子を各自用意することを伝える。ひまわりの種子は一人30ケ位あげる事にする。（ペット屋さんで大量に安く手に入る。）板目紙を円く切ったもののまわりにボンドを置き、まわりを作る。まん中にボンドをのせ種子をのせる。つまようじで形を整える。

２年生でも１時間でとても上手に出来た。

ブローチを身につける

⑬上記以外で取り扱った植物

フキノトウ　フキ　アブラナ　ヨモギ

ヒガンバナ　ネジバナ

マツヨイグサ

カタバミ

これらの植物は、学校にあったり、子どもたちがよく目にする植物である。

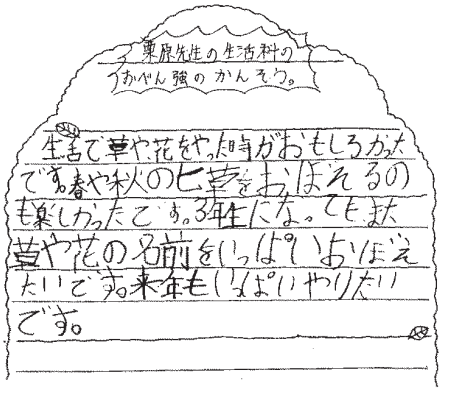
ネジバナは学校の近くの三角公園に、毎年たくさん出てくる。

カタバミは高学年になって葉緑素の学習をする時一番見やすい草である。どこにでもすぐはえてくるので、あちこちで見かける。親しくなってほしい草である。

５．研究の成果と課題

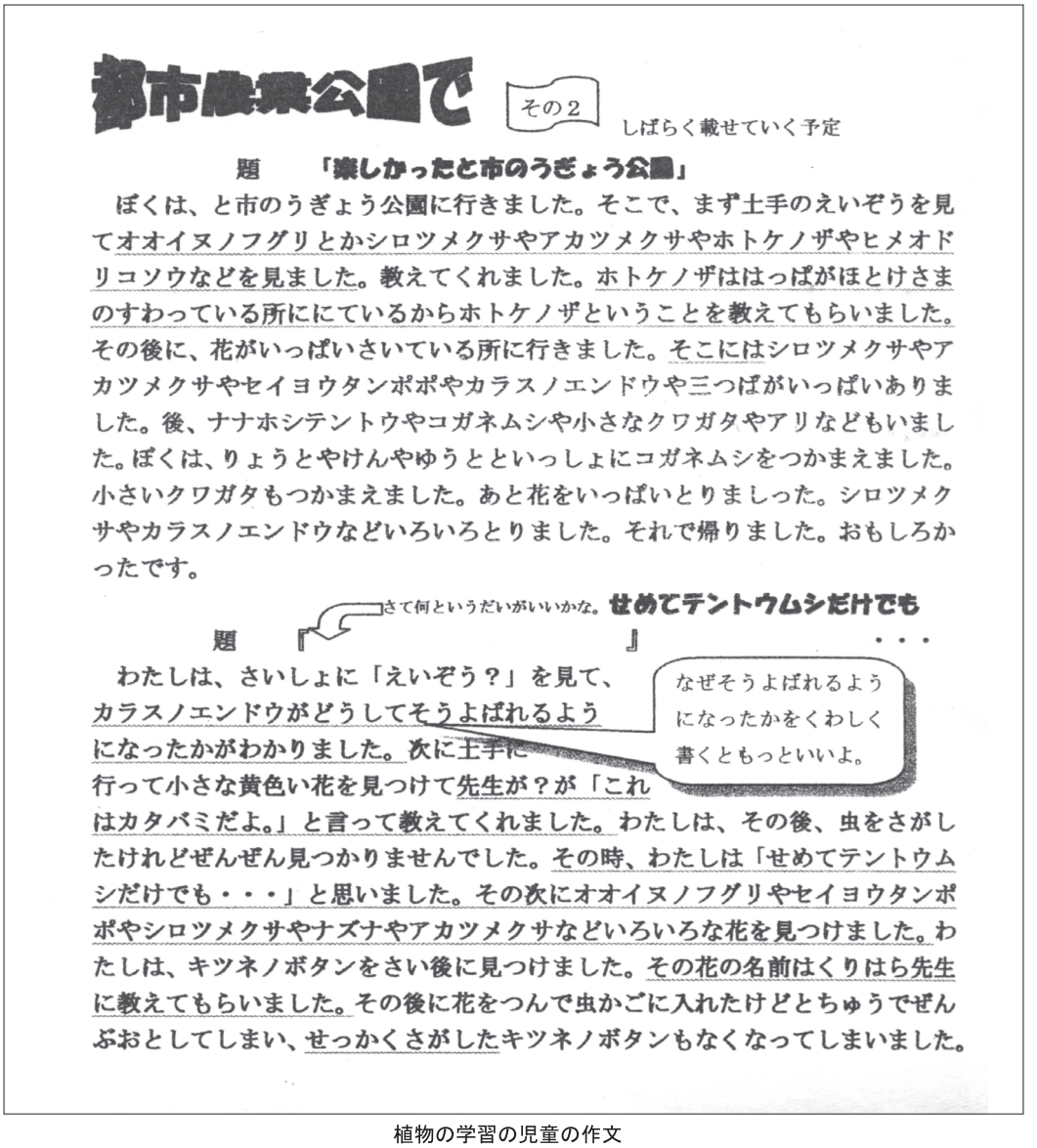
子ども達は野草の名前をどんどん覚えた。９月に、今迄にどんな植物を学習したかを聞いた時、約30種類を言うことができた。名前が発表されるたびに、なつかしそうに、うなずきながら聞いていた。子どもたちは名前を覚えるのがうれしそうである。授業で取りあげ、名前を教えると、しっかり覚える。

６月頃学校の廊下で保護者と会った時「先生、娘が私とおじいちゃんに雑草の名前をいろいろ教えてくれるんですよ。」と報告してくれた。２年生の終わりに書いた生活科の感想も、植物の名前を覚えるのが楽しかったと書いていた。



生活科の児童の感想文

３年生になって都市農業公園に生物の学習で行った。その時の作文に植物の名前がたくさん出てくる。一度聞いただけですぐに覚えられない。２年生の植物の学習が生かされているからだと、３年の先生に言われた。



都市農業公園で

その2　しばらく載せていく予定

題　「楽しかったと市のうぎょう公園」

ぼくは、と市のうぎょう公園に行きました。そこで、まず土手のえいぞうを見てオオイヌノフグリとかシロツメクサやアカツメクサやホトケノザやヒメオドリコソウなどを見ました。教えてくれました。ホトケノザははっぱがほとけさまのすわっている所ににているからホトケノザということを教えてもらいました。その後に、花がいっぱいさいている所に行きました。そこにはシロツメクサやアカツメクサやセイヨウタンポポやカラスノエンドウや三つばがいっぱいありました。後、ナナホシテントウやコガネムシや小さなクワガタやアリなどもいました。ぼくは、りょうとやけんやゆうとといっしょにコガネムシをつかまえました。小さいクワガタもつかまえました。あと花をいっぱいとりましった。シロツメクサやカラスノエンドウなどいろいろとりました。それで帰りました。おもしろかったです。

題　『　　』　・・・

さて何というだいがいいかな。せめてテントウムシだけでも

わたしは、さいしょに「えいぞう？」を見て、カラスノエンドウがどうしてそうよばれるようになったかがわかりました。次に土手に行って小さな黄色い花を見つけて先生が？が「これはカタバミだよ。」と言って教えてくれました。わたしは、その後、虫をさがしたけれどぜんぜん見つかりませんでした。その時、わたしは「せめてテントウムシだけでも・・・」と思いました。その次にオオイヌノフグリやセイヨウタンポポやシロツメクサやナズナやアカツメクサなどいろいろな花を見つけました。わたしは、キツネノボタンをさい後に見つけました。その花の名前はくりはら先生に教えてもらいました。その後に花をつんで虫かごに入れたけどとちゅうでぜんぶおとしてしまい、せっかくさがしたキツネノボタンもなくなってしまいました。

なぜそうよばれるようになったかをくわしく書くともっといいよ。

植物の学習の児童の作文

○課題

2年生でも、興味を持って野草の名前を覚えることができる。野草にあまりくわしくない人でもだれでも気軽に教えられるような資料作りをして行きたい。

親から子へ伝えられた植物などを使った遊びや知恵を、途絶えてしまった親の世代へも伝えていき、自然と人との関わりを考えさせていきたい。